



Title	平成25年度八重山地区社会教育委員連絡協議会事業報告： 第1回八重山地区社会教育研究大会開催
Author(s)	石垣, 三夫; 宮良, 篤
Citation	琉球大学生涯学習教育研究センター研究紀要 = FORUM ON LIFELONG LEARNING JOURNAL OF EDUCATION AND RESEARCH CENTER FOR LIFELONG LEARNING, UNIVERSITY OF THE RYUKYUS(8): 21-26
Issue Date	2014-03-31
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/30617
Rights	

平成25年度 八重山地区社会教育委員連絡協議会事業報告

～第1回八重山地区社会教育研究大会開催～

石垣 三夫¹・宮良 篤²

I. 大会開催に至った想い

私が幼小の頃の八重山は豊かな地域社会を形成しており、いつも社会の暖かい目がそこにあり、悪い事をする子どもがいれば誰となく叱ってくれる大人がいたし、良い事をすれば我が子のように褒めてくれる大人がいつも身近にいました。そこには、“地域の子は地域で守り育てる”という社会があり、今で言う社会教育が実践されていました。こういう素晴らしい社会環境の中で、親に、地域に育てて頂いたことに感謝します。

しかし、今日驚くほど社会背景が変化してまいりました。八重山においても例外ではなく、都市化の波が押し寄せています。核家族や科学技術等の進化により、私達のライフスタイルや価値観も多様化の一途です。家庭・学校・地域において今まで考えられなかった処々の問題を抱えるようになりました。家庭では、核家族化や地縁の希薄化等で子育てができない若い保護者が急増している。学校においては、いつも一番に取り上げられる学力向上の問題があり、東日本大震災により防災教育が重要になっている。又、キャリア教育等で学校だけでは対応できない出来事が浮上している。地域では、人間関係の希薄化により、地域の底力が弱まっているのが現状です。このように大きな変化をとげ、個々人では対応できなくなっている。昔から地域には「結い」の心がありました。このつながりの大切さを再認識し、八重山の古き良き時代の地域の底力を構築できればとの思いから、平成25年を社会教育元年と位置付け、第1回八重山地区社会教育研究大会を開催したしだいです。

家庭・学校・地域の三者がワークトライアングルを形成し、情報交換や交流を深めて、つながりや支え合いを大切に、「結い心」で活力ある地域社会を目指したく努力します。あざやかな子どもたちの未来を築くために。

II. 開催要項

- 趣 旨：八重山地区の社会教育行政関係者、社会教育団体関係者、学校教育関係者が一同に会し、各市町における社会教育の推進に必要な情報を得るとともに、実践事例に関する情報を共有し、時代の変化に対応した社会教育の創造をめざして、一層充実した活動に発展できるよう本研究大会を開催する。
- テ ー マ：「結の心で広げよう！ 家庭・学校・地域の輪 in 八重山（やいま）」
- 主 催：八重山地区社会教育委員連絡協議会
- 共 催：沖縄県教育庁八重山教育事務所、石垣市教育委員会、竹富町教育委員会

¹八重山地区社会教育委員連絡協議会会長

²八重山地区社会教育委員連絡協議会事務局長

与那国町教育委員会

- 5 日 時：平成25年11月30日（土）13：30～16：00（受付13時～）
- 6 場 所：石垣市健康福祉センター（検診ホール）
- 7 対 象：社会教育行政関係者（社会教育委員、社会教育主事、社会教育相談員など）
社会教育団体関係者（婦人団体、青少年団体、老人会、青年会、PTA、
公民館関係者など）
学校教育関係者（学校管理職、地域連携担当者、学校支援ボランティア等）
その他、本大会に関心のある方（NPO、一般、学生等）
- 8 日程内容： 司会者：八重山地区社会教育委員連絡協議会副会長 上勢頭 篤
- (1) 開会のあいさつ
- (2) 主催者あいさつ 八重山地区社会教育委員連絡協議会会長 石垣 三夫
- (3) 激励のあいさつ 沖縄県教育庁生涯学習振興課課長 藏根美智子
(代読 沖縄県教育庁生涯学習振興課副参事 宮里 成正)
- (4) 実践事例発表 ① 石垣市社会教育委員代表 半嶺 当永
② 竹富町社会教育委員議長 山城まゆみ
③ 与那国町社会教育委員会会長 田頭 政英
- (5) アトラクション 華千の会 與那國久枝「こっこまーやいまっこ踊り教室」
- (6) 講 演 講師紹介：竹富町社会教育委員 大泊 君子
平成25年度 琉球大学離島支援プロジェクト 一知のふるさと納税一
講師：国立大学法人琉球大学 学長 大城 肇
演題：「島における人づくりについて」
- (7) 閉会のあいさつ 与那国町社会教育委員 前礎美津子

III. 実践事例

1 石垣市の実践事例

石垣市社会教育委員：半嶺当永、石垣三夫、当山喜一郎、西表直子、浦崎美代子

(1) はじめに

石垣市でも、①学校では学力向上対策、教師の多忙化、いじめ問題等、②家庭では子どもの生活リズムの乱れ、放任、しつけ、規範意識の低下等、③地域では近隣との連帯意識の薄れ、公民館・老人クラブ・婦人会等への加入率の低下等の社会的教育課題がある。そこで、地域の実情に応じ、学校・家庭・地域の連携協力の取り組みを推進支援し、社会全体の教育力の向上を図る必要がある。

しかし、「学校・家庭・地域の連携協力」の重要性について認識しているものの、具体的にどういった活動を展開していけばよいのか、が大きな課題となっている。

(2) 石垣市教育委員会が推進している三事業、「学校支援地域本部事業」「放課後子ども教室推進事業」「家庭教育支援事業」について

① 学校支援地域本部事業

吉原小学校、新川小学校、石垣小学校、八島小学校、大浜中学校

② 家庭教育支援事業

川平小中学校PTA

③ 放課後子ども教室推進事業

崎枝小中学校、宮良小学校、真喜良小学校、富野小中学校、伊野田小学校

(3) 冠鷲プロジェクト「地域・家庭学習支援事業」について

① 地域のスポーツ団体保護者会の協力を得て、学校の授業終了後からスポーツ少年団活動を行う

までの時間を利用

② 保護者、シルバーセンター会員、高校生等による学習支援

	平成23年度	平成24年度	平成25年度
実施団体数	12団体	12団体	17団体
参加児童数	209名	374名	480名

③ 実施校・場所

大浜小学校、平真小学校、八島小学校、登野城小学校、石垣小学校、新川小学校、真喜良小学校、白保小学校、名蔵小学校、宮良小学校、図書館、まちなか交流館

④ 課題

冠鷲プロジェクトと地域・公民館との連携活動の推進など、これからも益々、学校・家庭・地域の全体が連携協力して取り組むことが重要になってくる。

2 竹富町の実践事例

竹富町社会教育委員議長 山城まゆみ

竹富町は、竹富島、黒島、小浜島、西表島、鳩間島、新城島、波照間島という島々の集まりである。町をあげての社会教育の催しとして「町民運動会」「町民球技大会」、「ばいぬ島祭り」や「子どもまつり」「やまねこマラソン大会」、島々持ち回りで開催される公民館、婦人会、青年会、老人会など各団体の研修大会等がある。島々の人々が一同に会するための船運賃、宿泊費等が大きく、度々の開催は困難だが「へだての海を結びの海に」を合い言葉に交流を深め島々の多彩な文化を学び合う機会としている。

町では地域ごとの各団体に呼びかけ、生涯学習の取り組みとして「社会教育学級」を開講している。各学級では、身近な人材を生かした地域色豊かな講座が住民主体で運営されている。伝統文化芸能、歴史、防災、気象環境、食品加工、手わざなどなど。お年寄りの知恵に学び、若者が新しい知識を教える、世代をつなぐ触れ合いと学び合いの機会であり、地域文化の新たな創造と伝統文化の記録継承の一助となっている。

この他、子どもの安全な居場所作り「放課後子どもプラン」では、地域の人を指導者に迎え空き教室などを利用した学びやレクリエーションを提供する、学社連携の取り組みがなされている。

それぞれの学級の成果は2年に1度の「生涯学習フェスタ」で発表する。次回は来年3月2日、西表島大原の離島振興総合センターにて開催いたします。舞台、展示、ワークショップなど、学び合いの輪を拡げる祭りにぜひお越しください。

都市部などに比べ社会教育のための施設、人、予算は乏しいのですが、母親たちの持ち寄りから始められた文庫活動や、個人、NPO法人などが主催するワークショップ、講演会、音楽会など自主的な社会教育活動が島々で行われている。

無縁社会などと言われる現代社会において、島々には厳しい自然の中で人が支え合い生きて来た共同体が在り、求心力を持つ自治公民館が社会教育の中心として機能している。

(竹富島の十五夜の天使の詞)

くぬ島くぬ村ぬ美風 童ゆいたわる心
くぬ島ぬ将来や 童にかかとう事
で一ちに育ち上ぎ 人とうなし

地域の宝である次世代育成、全人教育は昔から地域が担っていました。目をかけ声かけ褒め叱り、長じて、人として大切なものが身に付いた子を「ヒトウニンギン（人・人間）になった」と認める竹富島。人として生まれ、人の間で生きることを学び「人間」となるのだと感じられるシマムニです。

外からの移住者が増え、次世代の母親たちも島出身者は少ないのですが、その多くが地域文化を尊重し、地域の役割を担う人材となっています。人は社会的包摂（ソーシャル・インクルージョン）に応えるものであり、受け入れられた人々は社会のための働き手になり、新たな知識や技術などが地域に還元されます。先人からのジンブンと新しい時代の知恵。人と人をつなぎ学び合うことの大切さが思われます。

社会教育において社会的包摂（ソーシャル・インクルージョン）は分け隔てなく、人と人が、人と社会が繋がって行く形をめざす活動を指します。

「社会教育委員の仕事とは何か？」慶田盛安三教育長が話されました。

「良い社会づくりをどうするかが社会教育委員の仕事と考えて欲しい。良い社会とは何か？世の中でより弱いもの。子供、お年寄り、障害を持った人々などが安心して安全に生きられる社会である」

弱者が受け身で置かれるだけでなく、与え手としても在れるように。だれもが潜在能力を発揮出来、出番を持って繋がり合う社会を目指して、社会の一員である私達のだれもが、支え合い学び合う社会教育の実践者なのです。

3 与那国町の実践事例

与那国町社会教育委員長 田頭 政英

与那国町の概要

日本国最西端に位置する与那国島は、全国でも珍しい1島1町の自治体である。島の周囲は27・49kmで台湾まで111km。時折、台湾の山々の稜線が眺められることがあり、石垣島よりも近い。

3集落の一つ、祖納集落はまだ赤瓦の古民家や石垣、屋敷内に古井戸や福木の屋敷囲いが見られ、古い佇まいと静かな環境を保っている。島建ての文化の中心地である。

本土復帰直後3,000人余の人口は、島を離れる人が続出して減少に歯止めが掛からず、今は1,500人余が居住しているが船舶や航空機での人の往来で町内は賑わっている。



町社会教育委員の活動例

社会教育委員である私がここでは視点を変えて、学校との関わり、郷土学習、物づくりで地域のサークル活動に参加し、また講師として関わった事例を一例ではあるが述べたい。

- ① 与那国中学校では平成21年度から私たちの郷土についての学習で、民俗芸能棒踊りの横笛演奏法と並行して方言を指導した。



② 久部良中学校では同年、郷土音楽で歌三線の伴奏楽器としての横笛奏法を実践指導した。生徒たちの熱心な練習はのちに、県中学校総合文化祭（郷土芸能）（09年12月開催）に出場するまでに上達した。久部良中学校での指導は今年度まで続いている。

③ 比川小学校、与那国小学校、2幼稚園において自由活動で方言による読み聞かせを実践。



④ 物づくり・(子ども会で、民俗芸能で使用する横笛の作り方を実践し、芸能の中で笛がどんな役割を果たしているかを話した)。



(成 果)

- 社会教育活動に対する理解を深めることができ、事業が様々な場所で実施されるようになった。
- 子供から大人まで様々な人たちが関わる場で新しいつながりができた。

(課 題)

- 中学生との雑談の中で分かったことだが、この情報化社会においてこれほど発達した通信網で生徒達が溢れる情報をもとに自身の将来を描いている。それは心強い反面、今後の人口減少に伴う若年層と地域社会との関わりを考えさせられた。
- 与那国島の方言が消滅危機にある。方言を解せない世代が増えている中、町教育委員会は本年度において伝承推進事業を計画し、委員会を立ち上げた。方言大会開催も考えている。現状を見る限り今後は、活動を促進する指導者の育成やリーダーの養成確保が不可欠である。企画研究を要する。
- 平成15年からこの10年の自身の活動を辿り、振り返ってみた。青少年の健やかな成長、発達を願うのは大人に共通している。わたしは町の将来を見通す中で具体的に行動を起こしたい。

IV. アトラクション

華千の会 與那國久枝「こっこまーやいまっこ踊り教室」

- 與那國久枝氏の主宰する舞踊教室「華千の会」、その中で幼児、児童、生徒の初心者を対象に舞踊の楽しみを伝えるために「こっこまーやいまっこ踊り教室」が創設された。以降、多くの卒業生が八重山地区の各中学校、高等学校の郷土芸能部で中心メンバーとして、県大会、全国大会の常連校となる基礎を支えており八重山の伝統芸能が確実に継承されている。「人前で見せられるような物ではない」と與那國代表は謙遜するが、将来は八重山の芸能をしっかりと伝えていく幼児、児童、

生徒の見事な演技であった。

V. 講演

平成25年度 琉球大学離島支援プロジェクト 一知のふるさと納税—

講師：国立大学法人琉球大学 学長 大城 肇

演題：「島における人づくりについて」

1. (古諺) 米百俵の精神
2. 経済発展の方程式
3. 免疫系に学ぶ人事管理
4. 我が国を取り巻く状況
5. 鳩間島における体験
6. 島における人づくり

VI. 大会を終えて

八重山地区における悲願の社会教育研究大会開催を無事に終えることが出来、感慨深いものがある。これまで、石垣市、竹富町、与那国町の三市町社会教育委員、行政生涯学習担当者による研修会は持ち回りで開催されてきたが、何分、離島僻地は簡単に集まることが困難で、旅費もかかることから、次第に不定期に成り自然消滅的な状況になりつつあった。各島々においては社会教育委員が地道に地域の公民館、子ども会婦人会、青年会等の指導者として活躍しているが、地域の社会教育に対する格差があり、地区全体としての活動が停滞していた。今回の大会を社会教育元年と位置付け、多くの社会教育団体（公民館、老人会、婦人会、青年会）、学校関係者を招いた。その中でも特筆すべきは、三市町社会教育委員が全員参加したことである。今後の活動の景気づけに相応しい大会であった。

文責：石垣 三夫（八重山地区社会教育委員連絡協議会会長）

宮良 篤（八重山地区社会教育委員連絡協議会事務局長）